

36. 菌状息肉症の Ga-67 シンチグラフィの検討

白土 誠 中井 敏晴 阪原 晴海
細野 真 小林 久隆 小西 淳二

(京都大・核)

菌状息肉症における Ga-67 シンチグラフィについて検討した。対象となった症例は1987年1月より1990年12月までの4年間に行われた Ga-67 シンチグラフィ延べ2,180例のうち、病理組織診断において菌状息肉症の確定診断を得ているもの7例、14検査である。対象患者の年齢は33歳から85歳で平均58.6歳、男性3例、女性4例、発症から検査までの期間は平均10.9年であった。Ga-67 シンチグラフィ陽性率は、7例中3例、42.9%であった。陽性例の病期分類では全例II B以上であったが、陰性例の中にも stage III が2例含まれていた。Ga-67 の集積と腫瘍の大きさとの間には明確な相関関係は認められなかった。陽性例3例のうち、初回検査時にすでに陽性を示したのは1症例で、残りの2症例に関しては病状の進行に伴って陽性化したものであった。そのうち1例では経過中に病変が全身のリンパ節に波及し、これに伴いリンパ節、皮膚病変部に Ga-67 の取り込みが認められた。しかし、治療による病変の消退に伴い Ga-67 シンチグラフィも陰性化を示した。

以上のことより菌状息肉症における Ga-67 シンチグラフィの陽性率は必ずしも高くはないが、病変の進行およびそれに対する治療の効果判定の評価には有用であったと考えられる。

37. Xanthofibroma のシンチグラム

浜田 辰巳 藤井 広一 小野 幸彦
大西 卓也 松本富美子 中村 俊則
熊野 町子 石田 修 (近畿大・放)

xanthofibroma あるいは fibroxanthoma と呼ばれる骨病変は fibrocystic lesion に分類され、fibrous cortical defect あるいは non-ossifying fibroma 等とほとんど同義語に使われている。組織学的に証明された5例に骨シンチおよびガリウムシンチが行われたので、X線その他の画像所見とともに報告した。

症例は、47歳の大腿骨骨幹近位部1例、57歳と66歳の大腿骨遠位骨幹端2例、14歳と15歳の脛骨近位骨幹端2例であった。

X線所見は、全て周辺骨硬化を伴った輪郭鮮鋭な溶骨性病変として現れた。骨梁様の構造のために多房状に見えることがあるが、CTでは完全な骨梁でないことが示され、これらはかなり疾患特異的といえる。最近では、MR像も診断に非常に有用であると報告されている。

骨シンチでは全例集積を示し、小病変の1例を除いて、少ないし卍の強い集積であった。ガリウムでも全例弱いながら明らかに集積があった。

本症は、典型的には小児期ないし思春期の疾患とされているが、われわれの例は2例を除いて比較的高齢者であった。したがって、悪性腫瘍をまったく否定できず、各種の画像診断が行われた。骨皮質の良性病変であるこのような疾患には、一般に骨シンチで集積することは稀であるとされる。しかし、病変の大きさが関与するが、本疾患の場合、強い集積を示すということができ、その割にはガリウムの集積は軽く、良性を示唆するひとつの所見と考えられた。

38. 卵巣癌腫瘍マーカー CA125 と CA130 の血中濃度が解離した症例の検討

阪原 晴海 中井 敏晴 細野 真
小林 久隆 白土 誠 小西 淳二

(京都大・核)

小林 史典 野々垣比呂史 藤井 信吾

森 崇英 (同・産婦)

細野 雅子 越智 宏暢 小野山靖人

(大阪市大・放)

遠藤 啓吾 (群馬大・核)

CA130 は肺腺癌培養細胞株を免疫原として得られた2種類のモノクローナル抗体により IRMA 法で測定される腫瘍マーカーである。従来の CA125 と類似の抗原と考えられており CA125 と同様に卵巣癌患者で血中濃度が上昇する。これまでの研究から CA125 と CA130 は同一分子上の異なった抗原決定基であると考えられており、多数の患者での両腫瘍マーカーの値には強い相関関係が認められている。

ところが血中の CA125 と CA130 の測定値が著しく異なる症例がときに見つかった。そこで1988年9月から1991年3月までの間に両者を同時に測定した約20,000検体から両者の値に3倍以上の差があり、かつ高値を示すマーカーが100 U/ml 以上の検体を検索した。